

「わが子キリスト」論

清原万里

「わが子キリスト」は、聖書に題材をとりながら、イエスの肉の父であるローマ軍兵士を語り手として登場させ、イエス・「キリスト」を政治的戦略の産物として描いた作品である。つまり、「わが子キリスト」は、聖書の世界を徹底して人間のレベルで再構築した作品であり、読者の目も、まずはそこに引きつけられることは間違いない。

しかし、だからといって、武田の意図が、聖書世界の反転にあったとは言いがたいところに、「わが子キリスト」に論及することのむずかしさが存在している。そもそも、作品の構造自体が、きわめて特殊である。題名に「キリスト」を織り込み、その書き方から、それがイエスのことであるのは明白であるにもかかわらず、作品中にイエスは、赤ん坊と死体で登場するのを除いては、直接には一度も登場しない。作品はローマ軍兵士である「おれ」のモノローグの形式をとり、「おれ」と、イエスをとりまく人物たちとの関わりが中心的に語られる。無論、その語りの内容はすべてイエスに関わるものであり、すべての

人物が、なんらかのかたちでイエスに言及し、自らのイエス像を語るのではあるが、そこで具体的なイエスが浮かび上がってくるわけではないのである。

これと似た構造の作品として、例えば、三島由紀夫の「サド侯爵夫人」を思い浮かべることもできるが、その実態は決定的に異なっている。「サド侯爵夫人」の場合にも、複数の登場人物が、マルキ・ド・サドなる人物について、果てしもない会話を繰り返す、ついにサド本人は登場しないのであるが、作品中の人物たちにとっては、サド侯爵は、たとえそれが実際には幻像にすぎないにしても、少なくともリアルな存在として認知されており、彼女らの会話を通して、われわれは、あるサド像を組み立てることができる。つまり、「サド侯爵夫人」の場合、問題は、常にサドという一人の人間の存在にあり、サドという存在とルネならルネとの関わりと、それによって形成されるルネの自我が描かれていると言えるのである。もちろん、「サド侯爵夫人」についても、さまざまな解釈はありえようが、少なくとも、作品中では、常にサドその人のイメージが語られており、読者が、この作品からサドという存在を強く意識するのは、間違いないと思われる。

それに比べて、「わが子キリスト」の中で言及されるイエスは、奇妙にリアリティーを欠いている。誰が、どれだけイエスについて語るうが、イエスという一個の存在は、どうにも捉えどころのないままで、われわれの目の届かないどこかを漂っているという印象を受けるのである。言い直せば、「サド侯爵夫人」においては、「真の主人公はサド侯爵である」という物言いが、あるリアリティーを持ち得るのに対して、「わが子キリスト」については、「真の主人公はイエスである」という物言いが、リアリティーを持ち得ない側面がある、ということである。それは、作中人物たちの語り方に問題がある。彼らは、イエスについて語っているのだが、そのほとんどは、現実に存在する「人間」イエスについてではない。彼らが意識しているのは、イエスの未来であり、イエスの存在が社会に与えるインパクトである。イエスは、彼らの誰にも働きかけないし、何かを変えたりもしない。周囲の人間たちが、一方的に、イエスに何かを見いだし、イエスに何かを求め、ある象徴としての役割をイエスに与えようとする。そこでは、イエスは、一個の記号であり、イエスという個性を備えた人間である必要はない。言ってしまうと、イエスという存在の実体は置き換え可能であり、ある役割を果たすことができる人物であれば、それが誰であつてもよい、といった印象をうける。つまり、彼らが問題にしているのは、イエスの果たす役割だけであり、イエス本人には、なんの注意も払われていないと言つていいのである。

とすれば、最初に述べた作品の性格にも、疑いもたれねばならない。武田の意図が、聖書の人間的なレベルでの再解釈にあつたとすれば、イエスをここまで空虚な存在にする必要はない。むしろ、すでに

処女懐胎を否定した以上、徹底して人間的なイエスを描くことこそが、聖書の世界の反転には有効なはずである。しかも、作品では、最後に、いささか歪められたかたちではあるにせよ、イエスの復活が成就され、あまつさえ、復活したイエスは治癒の奇蹟をもたらしてしまう。こうなつては、「わが子キリスト」が、イエスを神の子ではなく、人間として位置づけ、聖書に書かれたイエスの事跡を政治的戦略の産物として描くことを目的とした作品とは考えにくくなるのである。

では、武田は、何を意図してこの作品を書いたのであるか。それを解く鍵となるのは、いま触れた、作品結末の奇蹟の存在である。作品の終わり、語り手である「おれ」は、親子であるが故のイエスとの外見の類似に手伝われて、復活したイエスを演じることになるのだが、そこで、次のような事件が出来るのである。

「おう、おう」

外部のそうぞうしい物音とは全く無関係に、若者のうめき声がおれの耳のすぐそばで聞こえた。

「おう、おう、おう」

と、マリアもうめき声を発しながら、おれにとりすがり、気ちがいじみて大きく見ひらかれた両眼から大粒の涙をこぼした。

盲人は、おれたちの誰よりもパッチリとした両眼を奥の奥まで見ひらいておれを見つめていた。そして、二歩、三歩と足なえの幼児はおぼつかないに、おれに向つて歩きはじめていた。

イエスよ。かくしてお前は復活した。そして神の子イエス・キリ

ストとなられた。誰がそれを疑うことができようか。

△おれ△は、偶然釘を踏み抜いたことをきっかけとして、残る手足にも釘を突き刺し、結果的に復活したイエスと誤認される。それが、なぜか盲の老人と足なえの幼児に治癒をもたらしてしまう。つまり、△おれ△は奇蹟を起こしたのであり、そのことによって、△神の子イエス・キリスト△の復活が実現してしまうのである。言うまでもなく、△おれ△自身のうちには、奇蹟を起こすような力は宿っていない。従って、この奇蹟は、何か外部の力が△おれ△を通してはたらいだ結果起ったものと考えざるを得ないが、それが何であるかは、ここでは明示されていない。

このことは、「わが子キリスト」を解釈する上で、一見、困った問題を提起する。すでに述べたように、「わが子キリスト」は、冒頭から、あくまでも人間のレベルでイエスをとりまく状況が描かれ、そこでは、イエスが起こした奇蹟さえもが、ローマの最高顧問官による演出として説明される。従って、読者としては、まずは、この作品を聖書の世界の反転をねらったものと受けとめつつ、作品を読みすすめていくことになるが、それが、土壇場で裏切られることになる。奇蹟が起ったということは、単純に考えれば、「神」の存在が証され、イエスがキリストとしてよみがえったということになりかねないのであり、それは、人間的レベルでの聖書の再解釈という視点からみれば、あってはならないことである。また、逆に、作品の結末で「神」の存在が証されたのだとすれば、そこに至るまでの人間のドラマは、超越的な存在の前に相対化され、その意味を失うことになりかねない。「わが

子キリスト」における奇蹟の実現は、いかにも唐突であり、どうしてこのようなことが起きるのか、読者にはなかなか納得しにくい性格をもっているのである。

このような奇蹟の存在は、作品の解釈をなおさら困難にしているかのように見える。先ほどから何度も述べているように、「わが子キリスト」は、その内容から、聖書世界の反転をねらった作品と受け取られやすい性格を有している。その立場から言えば、たしかに、奇蹟が起きるのは、はなはだ困った事態であり、作品に混乱をもたらしているとは見えぬ。

しかし、そのような先入観を捨てて、奇蹟が起きたことを起点にして、作品世界を逆照射してみると、また別な評価の道が開けてくるように思われる。イエスが復活し、奇蹟が行われたということは、それがどのような意味を持つのかは別にして、何事かが成就したということとであり、それがこの作品に積極的な性格を与えていると言うこともできるのではないだろうか。少なくとも、いかに奇蹟が唐突に見えようと、奇蹟を起こした要因は作品中に語られているはずであり、そこで何が成就されたかは明らかにできるはずであるし、そこから、作品の積極的な意味をくみ取ることも可能なのではないだろうか。特に、すでに述べたように、聖書を人間のレベルで解釈しながら、敢えて作品の結末では奇蹟を起こしたということは、武田が、そこになんらかの意図を隠していたことを意味しているのではないだろうか。

本稿では、この奇蹟の問題を軸にして、「わが子キリスト」が提示しているものを探ってみたい。

さきに述べたように、「わが子キリスト」の結末の奇蹟は、いさか唐突に起こり、それがいかなる力によるものかは、容易には確定できない。しかし、それがすくなくとも、いわゆるキリスト教的な絶対者としての「神」の力によるものではないということは、いくつかの状況証拠から、推定できる。自明とも思えることを掘り返すことになるが、ひとつの手続きとして、本論に入る前に、一応の確認を行っておきたい。

第一に、これは、さきに述べた疑問と重なるのだが、単純素朴に考へて、イエスの復活による神の存在証明を行うのであれば、イエスの肉の父らしき人物をわざわざ語り手として設定し、聖書記載のイエスの言動を政治的策略の産物とした上で、イエス本人ではなく、語り手へおれへ復活を演じさせるという手の込んだ仕掛をする必然性がないということがある。「神」による奇蹟が存在するのであれば、イエス本人を復活させばすむことではないのか。それを、あえてへおれへ奇蹟を起こさせたのには、それなりの理由があるはずである。この点は後に考察するが、主要な登場人物の情念が集中し、ひとつの焦点として機能しているへおれへが奇蹟を演じた以上、奇蹟は「神」よりもむしろ、人間の情念に結びついていると言っているのではないだろうか。

第二に、次のような部分の存在があげられる。

お前の「神」はお前にとって、父親であるよりもむしろ「主」「主人

人」だったのだ。おれがお前にとって「主」「主人」などありうるはずはないのだし、今となってはお前以下の下賤の者、お前の「父親」に背いた、お前の「父親」から罰せられる、ある別箇の父親なのだからな。

これは、へおれへが、イエスの信じた「神」についてイエスに語りかける部分の一節である。ここで、へおれへは、自分のことをへお前の「父親」に背いた、お前の「父親」から罰せられる存在であると語っている。この作品は、全体が、へおれへの、死せるへわが子キリストへ向けての語りという体裁をとっており、その語っているへおれへの「現在」は、明らかに、イエスの死後、へおれへがイエス復活を演じた後のことである。無論、これについては、さまざまな問題があるが、作品の結びの言葉からして、へおれへの語りの「現在」が、「復活」以後であることは間違いない。なお詳細な検討は必要だが、時制の変化などからみて、「復活」直後というのが妥当なところかとも思われる。

もし、へおれへが「神」の力によって奇蹟を演じたのであれば、へおれへは「神」に祝福された者でなければならず、「神」にへ背いた者というのは当たらないことになる。また、この引用の少し前で、へおれへは、「神」はイエスを愛していたが故にイエスを救おうとはしなかったのだと述べており、いかなるかたちであるにせよ、イエスの復活が「神」の力で実現してしまったという解釈は、へおれへの言葉に抵触することになる。つまり、少なくとも、へおれへにとって、奇蹟は、「神」の祝福の証明ではありえなかつたはずなのである。

以上、いささか蛇足とも思える検討を行ったが、この二つの点を考えれば、奇蹟を起こしたのが「神」であるとの可能性は、かなり薄いのではないかと思われる。無論、論理的な手続きとしては、「神」の存在の可能性が完全に否定されたわけではないが、その穴は、奇蹟を起こしたものを作品中から抽出することで埋めることができよう。続いて、作品世界から最も合理的に導き出せる奇蹟の根拠を求めてみたい。

三

作品結末における奇蹟を起こしたのが、「神」でないとするならば、作品中から合理的に求められる奇蹟の根拠は、人間的なレベルのものであるはずである。すでに述べたように、奇蹟を演じる「おれ」自身は、何等特別な力を持っているわけではない、一人の老兵士に過ぎず、復活したイエスと誤認されたのも、もとはといえば親子であることによる肉体的類似のために他ならない。つまり、「おれ」の内部には、単独で奇蹟を起こしうる要素は存在していないのである。

とすれば、そこにはなんらかの外的要因が関係しているはずで、しかも、それが「神」でないとするならば、まず、「おれ」に関わった人物たちの存在が要因として考えられねばならないだろう。実際、作品中で、「おれ」が、イエスの肉の父であるということを除いて少しでも特別な存在であるとすれば、それは、「おれ」一人が、イエスととりまく関係者のすべてと関わりを持っている点であり、そのような「おれ」の位置を考えれば、「おれ」に関わった人々の持つなもの

かが、「おれ」に奇蹟を起こさせたのだ、と考えるのが最も単純であろう。

お前に対する、こらえ切れぬほどの深い愛情（いや簡単な親しさだったが）が湧き上り噴き上ってきて、おれは釘を右足の甲にあってがい、石をとりあげてそれを力いっぱい打った。——（中略）——。右足を刺しとおした釘をひきぬき、さらにそれをおれの右の手のひらにあてがって石で打ち、またさらにそれをひきぬいて、左の手のひらに同じ釘の傷痕をつくるまでのあいだ、おれが誰の命令によってそんなばかばかしい「実行」をやっているのか、誰にもわかるはずはあるまい。最高顧問官どのか、裏切者ユダか、母マリアか、それともお前の意志がそうさせたのか、そんなことは判明したところで何の意味もありはしなかった。

四つの傷の痛みにはげまされてではなくて、ますますおれが普通の人間でなくなっていくという恍惚感だけで、おれはだらだら斜面をのぼり、マリアの小屋にたどりついた。

これは、作品の結末近く、「おれ」が、マリアの小屋へ向かう場面である。「おれ」は、誤って左足で釘を踏み抜き、イエスが受けたのと同じ傷を負うのであるが、その後、突如として激情に捉えられ、残る手足を、自ら釘で刺し貫く。結局、容貌がイエスに酷似していたことと、手足に釘の傷があることのために、「おれ」は、マリアの小屋で復活したイエスと誤認され、復活劇を演じてしまうのであり、この部分は、奇蹟につながる最も重要な部分だと言える。

ここで注目したいのは、△おれ▽が、釘で手足を刺し貫く行為を△実行▽と呼び、それを誰かに命じられて行っているのだと感じている点である。△おれ▽は、それが誰であってもよい、という主旨のことを言っているが、少なくとも、最高顧問官か、ユダか、マリアか、あるいはイエス自身かのいずれかがそれを命じたのだと感じているらしいことは、引用から読み取れる。そして、その△実行▽を行うことで、△おれ▽は、△普通の人間でなくなっていく▽のであり、その結果、△おれ▽が奇蹟を行う力をつけたと考えることができる。もちろん、△おれ▽の内部では、△普通の人間でない▽という感覚は、△恍惚感▽にすぎないのであり、自分が奇蹟を起こし得ると考えているわけではないし、復活を演じるという自覚があるのでないが、作品の結末を読む限り、ここにしか、奇蹟の直接的な根拠は書かれていないように思われる。

問題は、△おれ▽を△普通の人間でなく▽した、△実行▽の性質である。作品中には、一箇所だけ、△おれ▽が△実行▽を命じられる場面がある。

「地上にあってイエスの仇敵であったにせよ、いや、イエスの最愛の弟子であったにせよ」

と、起ち上ったユダは言った。

「いや、たとえイエスの生みの親、イエスの裏切者であったにせよ、やがて我らすべては、ひとしなみに主の復活を見ることになるんだからね」

「どうしても、おれがお前さんをしめ殺すのか」

「そうだ。キリストの御名によって、わしはそれをあなたに命ずるのだ。そうすることだけが、あなたの救いになるのだ。もしためらったら、あなたは永久に救われざる者になってしまうのだ。さあ、今こそあなたは『実行』ということの真の意味を悟ることができるのだ。そうして、実行のあとの真の『結果』の有様を自分の目でたしかめることができるのだ」

抵抗できがたい權威をもって、彼は口をつぐみ、ゆっくりと小屋の中に入り、ほんの形式的に二回目の首つりをやり、二回目の失敗をやらかした。

これは、イエスの処刑後、ユダが、イエスを裏切った者として死ぬために、△おれ▽に自分の首を絞めて協力するように求めている場面である。実のところ、ユダはイエスを裏切ってはいないのであるが、すでにイエスを裏切ってしまった他の弟子たちの裏切りを帳消しにし、イエスが「神」の子であることを立証するために、買収の証拠となるべき銀貨を用意して、裏切り者として死んでいこうとしているのである。なぜ彼がここまでやらなくてはならないのかについては、後に触れるとして、ここでは、△実行▽の問題を見ておきたい。

ユダの言葉によれば、ユダの首を絞めることが△実行▽であり、それをすることによって、△おれ▽は、その結果を目にすることになる。彼が、単に自分では首をくくれないからではなく、意図的に、△おれ▽に首を絞めさせようとしていることは、二回目の首つりの失敗を見れば明らかであるが、それは、△おれ▽を△実行▽に駆り立てるためだと言える。そして、ユダがそのようなことを敢えてする目的、すなわ

ち、△実行▽の結果は、話の流れからみて、△主の復活▽であると考
えられる。彼にとって、△主の復活▽は、彼自身の生命を犠牲にする
に値する主題であり、しかも、それを確実にするためには、どうして
も△おれ▽の協力が必要だったのである。

「ローマ帝国は亡びる。亡びたら、二度とよみがえりはしない。

だが、わたしたちユダヤ族は、かならずよみがえるのだ」

「ユダヤ族の誰が。誰がいったいよみがえられるのかね。パリサイ
人もサドカイ人も熱心党も女子供も、すっかりよみがえることがで
きるのかよ、え？」

「選ばれた御方が、よみがえって下さるのだ。どうあっても、その
御方によみがえっていただけなければならぬのだ。その御方たった
一人の復活のために、わしらは喜んで死んで行かねばならぬのだ」

「イエスだな。その御方とは」

「そうだ」

「では、イエスがよみがえってくれなかつたら、どうするつもりだ」

「だから、どうあっても、よみがえっていただくのだ」

「ところで、イエス自身によみがえりの予定でもあるのか。奴自身
が、自分ならよみがえれるという自信でもあるのか。それは、怪し
いもんだぜ」

「だから、どうあっても、わしが言うのだ。あの御方にその予定や
自信がおありになろうとなかろうと、どうあってもあの御方をよみ
がえらせねばならぬのだ。それが、わしらの責任なのだ」(傍点マ
マ)

この会話からわかるように、ユダにとって、イエスの復活はどうし
ても必要なことである。ユダは、ユダヤ民族の滅亡寸前の現状に絶望
しながらも、なんとか民族をその窮地から救いだそうと、懸命の努力
を行っており、そのために不可欠な経済力を身につけた貿易商人で、
最高顧問官に協力して、イエスの神格化に手を貸している。彼がイエ
スの復活を△どうあっても▽実現させようとするのは、それがユダヤ
民族の復活の象徴だからであり、そこにしか民族の将来の希望はない
と思いつめているからに他ならない。その目的からいって、イエスの
復活は、最も重要な事件であり、もしかしたら起るかもしれないといっ
た曖昧な希望であってはならない。イエス自身にその力があろうとあ
るまいと、あるいはそのつもりがあろうとあるまいと、それこそ△ど
うあっても▽復活は実現されねばならないのである。それでなければ、
彼がイエスの神格化に手を貸す意味はない。そして、イエスの復活を、
神頼みや偶然によってではなく、人間の力で確実に実現させるのに欠
かせない人物として、ユダの前にあらわれたのが△おれ▽だったので
ある。

「わしは、知っているのだ。あなたがあの御方の肉の父親であるこ
とを知っているのだ」

——(中略)——

「あなたには、あの御方の復活に立会う資格がありなされる。あなた
こそ、あの御方のよみがえりに力を貸すことのできる選ばれた人な
のだ。あなたと、この私。この二人が処刑されたあの御方をよみが

えらせなければ、あの御方の死は「死」となって、「不死」とはならぬのだ」

——(中略)——

「あなたと私は、あの御方の処刑の直前、あるいは処刑の直後に再び相い会うであろう。そしてその時、あなたはおのれのなすべき務めを知るであろう。事がおわれば、あなたの重くるしい迷いから、あなたは永遠に解き放たれるであろう」

ここからわかるように、ユダは、△おれ▽こそイエスの復活を実現できる人物と信じている。そして、二人が再び出会ったとき、△おれ▽が△おのれのなすべき務め▽、つまりは△実行▽の意味を知ると予言しているのであり、△おれ▽はその予言どおり、ユダの首を絞めることで、△実行▽の意味を知って、イエス復活への第一歩を踏み出したのであった。

ただ、ここで重要なことは、ユダが△実行▽と呼び、△おのれのなすべき務め▽と言ったのは、単にユダの首を絞めるということだけではなかったということである。

「神」の天幕のように、夜がおれの上にすっぽりと降りてきて、もはやその大きな天幕をまくりあげることができないのに、それでもおれはまだ「実行」をつづけねばならなかった。

夜明けまで、どのくらいの時間が残されているのか、おれにはわからなかった。だが、次の朝の光が地上に射しかけてくるまでに、おれはおれの「任務」をやりとげねばならぬと覚悟していた。

これは、ユダの首を絞めて、首吊りを偽装した後の△おれ▽の言葉である。ここで△おれ▽が△実行▽と呼び、△任務▽と呼んでいるのは、直接的には、イエスの弟子を捜し出して、ユダこそが裏切り者であったと告げることである。これは、一見、イエスの復活とは、なんの関係もないことのように見えるが、イエスの弟子が裏切り者でないと保証されることは、「神」の子イエスの地位を不動のものとするために必要であり、△おれ▽は、ユダの希望に沿って、イエスの復活に手を貸そうとしていると言える。そして、弟子を捜してさまよううちに釘を踏み抜いた△おれ▽は、△実行▽の仕上げとして、残る手足を釘で刺し貫き、復活したイエスとなるのである。

このように、△実行▽という言葉を手がかりにして探っていくと、ユダの言葉に従って△実行▽の意味を知り、△普通の人間でなくな▽った△おれ▽が、イエスの復活、そして、奇蹟という結果を実現したのだと考えることができる。周知のとおり、聖書におけるイエスの物語は、旧約聖書の預言と、新約聖書に記されたイエス自身の言葉に含まれた預言のすべてが実現されていく過程であると見ることができ、それが、聖書の神性を保証しているともいえる。しかし、その中でも最も重要な復活の予言がユダによってなされたとすれば、作品結末の奇蹟はその予言の成就である以上、奇蹟を起こしたのはユダの、つまりは人間の情念だということになりはしないだろうか。

ところで、イエス復活にかかわったのは、ユダ一人ではない。△おれ▽自身、△おれ▽に△実行▽を命じたのが、△最高顧問官どのか、裏切者ユダか、母マリアか、それともお前▽か、わからないと考えて

いる。これらの人物のうち、イエスは、赤ん坊と死体としてしか、直接には登場しない以上、考察の対象とはなり得まい。他の二人のうち、復活との関わりが比較的はつきりしているのは、最高顧問官である。

最高顧問官は、ローマからユダヤ占領政策の担当者として派遣された人物で、ユダヤ占領のための方策として、ローマに都合のよいユダヤの指導者をつくりだそうと考える。実のところ、最高顧問官こそが、イエス神格化の立て役者であり、すべての事件の張本人だと言うこともできる。彼は、数多くの預言者の中から、イエスを選びだし、奇蹟と教えを演出する。例えば、イエスが、 \wedge 殿られても殴りかえ \vee すなと教えれば、それを \wedge 「敵が左の頬を打ったならば、我らは右の頬をさし出そう」 \vee と歪曲し、あるいは、 \wedge 神のものは神へかえせ \vee という言葉に \wedge カイザーのものはカイザーへかえせ \vee という言葉をつけ加え、さらには、食料が増えるという奇蹟を仕掛ける。つまり、聖書に語られているイエスのさまざまな言動や奇蹟が、すべて最高顧問官の演出によるものとして描かれるのである。

最高顧問官が、このような手段でイエスを神格化するのは、一見、占領政策という目的に反するかのように見えるが、そこには次のような意図が隠されている。

「ただし、たよりになる指導者が彼らのあいだに一人として見出されず、ただただ、信頼しても信頼しなくても結果は同一になるていの、うぞうむぞうの親分衆のみが、ユダヤの民の上層部としてむらがつているにすぎないとするならば、われらはいかにすべきであるか。強力なる指導者を失った彼らの仲間うちが、そのためどのよ

うに乱れに乱れようとも、われらは喜んだり悲しんだり気にかけてりする必要がないが、その乱れ方がある一つのけしからぬ方向に傾き、それによってわれらの勢力が損害をうけぬようにするための警戒はおさおさ怠ってはならぬ。警戒するだけでは足りぬ。むしろ、積極的にこちらの好む方向へ、奴らの乱れを導いてやる明確な方針、策略を打ち出さねばならぬ。つまり乱れに乱れる奴らのまっただ中に、ハッシとばかり強靱なる杭を打ちこみ、それにわれらの太い手綱をゆわえつけねばならぬ。その杭とは何か」

——(中略)——

「そんな者が、発見できますでしょうか」

「発見するということは、つまるところ、育てあげ製造することなのだ。まぼろしの指導者、まぼろしの予言者、部落民どもの夢とねがいの根源をなす『力』を、奴らにかわってむしろ自身の手で、彼らの眼の前にありありと出現させてやるのだ」

最高顧問官は、独身の禁欲主義者で、精神の研究に没頭しているという、政治家らしからぬ人物で、独特の論理を持っており、ここで \wedge おれ \vee に語っていることも、一応論理的に筋が通っていると見える。つまり、全ユダヤ民族の精神的支柱となるような精神の指導者を自ら手で育て上げ、彼を思いのままに動かすことができれば、それは、ユダヤ民族の精神を思いのままに動かしていることになるという理屈である。その際、指導者の指導力が強ければ強いほど、策略は効果的であるということになる。占領政策において最も重要かつ困難なのは、被占領民の精神を掌握することだというのは自明だが、それを、懐柔

策や、強圧的な政策によるのではなく、最も巧妙な手段で実現しようとしているのだから、最高顧問官はなかなかしたたかで、かつ、独創的な人物だと言うことができる。

しかし、最高顧問官の、自分に都合のよい指導者を発見するという政策は、単なる占領政策といった、冷徹な政治の論理の範疇を逸脱していく。

だんだんとおれには、有望な政略をさずけてくれる顧問官どの自身が、地面から足がはなれ、宙にうかんでいるような、夢想の情熱にもえあがって万事を忘れている、部落民のまぼろしの指導者たちに似かよってくるような気がしてきたのだ。御出身が奴隷なのだから、そうなつてもいふかるには当たらないが。

だが、いずれ夢想の情熱は伝染しやすいものだったし、それに秘密の計画は、秘密であり計画である。そのことだけですぐさまおれたちを誘惑し、ふるいたたせてくれるものだった。

これは、さきの引用に続く部分での「おれ」の感想であるが、いま見たような政策を授ける最高顧問官が、「部落民のまぼろしの指導者」にたとえられている点に注目したい。彼のこのような「情熱」は、明らかに冷徹な政治家からの逸脱であり、彼の策略は、彼自身の情念に支えられていることがわかる。おそらく、精神の研究に没頭する最高顧問官にとって、イエスをめぐる策略は、人間を駒とした一種のゲームであり、彼は、ひとつの民族を思いのままに操ることそのものに、占領政策という目的を離れて「情熱」を注いでいるのであろう。ユダ

ヤの指導者が、最高顧問官の思い通りになるとすれば、最高顧問官こそがユダヤの真の指導者だということになり、それを望む彼の「情熱」は、まさに「まぼろしの指導者」のそれなのである。

そのような最高顧問官の情念は、引用にもあるように、「おれ」に伝染し、「おれ」を、イエスをユダヤの指導者として祭り上げるゲームに引き込んでいく。そのゲームの最後に最高顧問官が「おれ」に命じたのが、イエスの復活であった。

「熱心党の正直者がわしを刺しおった。だが、それがどうしたと言うんだ。わしはイエスを神の子にしてやる。あの人間の子を神の子にしてやることができる。それができるのは、わしだけじゃ。あいつの弟子どもは、あいつを愛しておる。じゃが愛しておるだけでは何もできはせんじゃ。イエスを復活させろ。ユダと力をあわせて、あいつを生きかえらせろ」

「わたしがですか」

「そうじゃ」

凶器は槍ではなくて、短刀だった。だがどんな刃物でも刺せば刺された部分に孔があき、血が流れる。しかもお前と同じわき腹で、傷口も同じぐらいの大きさだった。

「……御命令は必ず守るつもりですが。もしもイエスが復活できたとして、ご自分は復活なさらんでもよろしいので？」

「バカ者。奴が復活すれば、わしも復活できるんじゃ」

「ははあ、さようですか」

イエスの処刑と時を同じくして、最高顧問官は、熱心党員に暗殺されるのであるが、死を目前にした彼は、ユダと同じように、イエスの復活を「おれ」に命じるのである。但し、最高顧問官がイエスの復活を望んだのは、ユダとは異なる動機からであるの言うまでもない。

彼は、自分の策略の仕上げとして、復活を望んでいる。それは、イエスが復活し、不死を獲得するということは、自分の意志が復活し不死を獲得することに他ならないからである。つまり、ユダが、ユダヤ民族の復活と不死を願ったのに対して、最高顧問官は、自己の意志の復活と不死を願ったのと同じことができる。しかし、いずれにせよ、この最高顧問官の言葉が、「おれ」に影響を与え、イエス復活の原動力となっていることはたしかで、その意味では、顧問官もまた、結末の奇蹟にかかわっていると見えるだろう。

それでは、「おれ」が、「実行」を命じた者としては名前をあげなかった、形式上のイエスの父、ヨゼフはどうであろうか。

ある意味では、ヨゼフの立場は、作中の登場人物の中で、最も微妙であると言える。彼は、形式的にはイエスの父であるが、実際には、イエスが神の子であれ、「おれ」の子であれ、イエスとはなんの血縁もない。しかも、「おれ」が、実はイエスの肉の父であるにもかかわらず、決して表に出ることなく、表面的にはイエスとは無関係な存在として振舞っているのに対して、ヨゼフは、肉のつながりはないにもかかわらず、表面的にはイエスの父として振舞わざるを得ない立場におかれている。しかし、イエスがもし神の子であるならば、イエスに人間の父は存在してはならないのであり、従って、ヨゼフは、存在してはならない立場に身を置いたことになる。

あれつきり、おれはヨゼフに会っていない。おれの他の誰もが、あの男の行末とどんづまりを知ってはいない。おなじ「父親」グループの一員だから、ひいきにして言うわけじゃない。だがあの正直な職人は、お前さんの弟子たちより卑怯者だったわけでは、さらさら無いのだ。あの男は、お前さんを有った男として確立するために、ただそのためにめだけ、自分自身を無かった男として勇敢にも消滅させ蒸発してしまったにちがいないのだ。お前さんの弟子たちが、お前さんの神秘性を保護するために、あの男の一生の物語を、ことさら抹殺しようとしたなどと、そんなひねくれた考えは、おれには持ちあわせがない。(傍点ママ)

聖書において、ヨゼフは完全なわき役であり、何等積極的な役割を果たさない。それどころか、イエスの処刑に際して、ヨゼフがいったいどこで何をしていたのかは全く不明である。そのことについて、「おれ」は、ヨゼフが、自身が存在してはならないものであることを自覚し、イエスの神格化を果たすために、意図的に姿を隠したのだと考えているのである。

ヨゼフが、なぜそれほどまでして、イエスを「神」の子としなくてはならなかったのかは、十分には説明されていないが、とにかく、彼が、「神の子イエス・キリスト」という觀念の成就のために、自身の存在を抹消することを選んだことは間違いない。そして、ヨゼフ自身は、「おれ」に、イエス復活を示唆するようなことは何も語っていないにせよ、その存在が「おれ」にとって無視しがたいものであったこ

とは作品の叙述を見ても明らかであり、ヨゼフもまた、イエス復活に手を貸した人物であると言えることができるだろう。

最後に、イエスの母、マリアについて考えてみたい。

積極的にイエスの復活を願った人物たちと違って、マリアは、直接に復活を語りはしない。むしろ、イエスの処刑後には、イエスの亡骸を抱えながら、△おれ▽に、イエスの復活を信じていないことを示している。しかし、作品中で、△おれ▽が最も影響されたのは、あるいはマリアであったかもしれない。結論から言えば、マリアは、△おれ▽を混乱させ、論理の外へ連れ出す存在である。マリアは、△おれ▽の前にあらわれる度に大きな変貌を遂げ、ぼろ切れのような貧しい女から、裕福な主婦、そして啞の乞食と、次々とイメージが変化する。イエスに関しても、神の子であると言うかと思えば、△おれ▽の子であると主張し、常に△おれ▽を混乱に陥れるのである。

△おれ▽は、論理学を学んだ男で、論理学の手順に従って物事を考える人物であるが、マリアの前では、その論理は通用しない。

そうしゃべりながら、おれはとても恥ずかしかった。相手を説得するために用いる論理、おれのおそわった論理学のぜんぶ、それからマリアとこうやってすじみちたてて話しているおれの舌と心が恥ずかしかった。説得はできそうだが、説得することが正しいとは、いや正しいどころか、何か少しでも意味があるなんぞと思われなかつたからだ。おれはただ、はやいところすましてしまいたかつたのだ。

これは、イエスの亡骸を手放そうとしないマリアに、亡骸を手放す

ように△おれ▽が説得を試みる場面である。ここで、△おれ▽は、あくまでも自己の論理に従おうとしないマリアを前にして、自己の論理の正当性を疑うだけでなく、何が正当かといった理知的な判断力そのものを喪失してしまう。作品の結末で復活を演じる際の△おれ▽は、一種の忘我の状態にあり、行為と結果との因果関係など全く念頭にないままに、復活したイエスを演じてしまうのであるが、△おれ▽が、そのような、理知的判断を逸脱した忘我の状態に入るに当たっては、マリアの存在が大きく影響しているようにも思われるのである。△おれ▽が奇蹟を起こす場面でも、マリアは△おれ▽の手をとって盲目的老人の眼と、足なえの幼児の足にあてがうという役割を果たしており、彼女もまた、奇蹟に関係していると言っている。

以上見てきたように、△おれ▽をとりまくさまざまな人物たちが、イエスの復活を願い、あるいはイエスとかかわること、△おれ▽を△実行▽に追いやったと見ることが出来る。そして、その△実行▽の総仕上げが、結末の奇蹟であったとすれば、それは、△おれ▽をとりまく人物たちの情念が引き起こしたものと言えるだろう。

つまるところ、「わが子キリスト」に登場する人物たちは、イエスという人物について語っているかに見えて、実は、「イエス」という一つの観念について語っていたのである。無論、その観念の内実は、それぞれに異なっている。ユダにとってそれはユダヤ民族の存続であったし、最高顧問官にとっては自己の意志の存続であった。しかし、ともかくにも、彼らのすべてが、それぞれの抱く「イエス」という名の観念を△おれ▽に語り、△おれ▽を△実行▽へと追いやつたのである。従って、結末の奇蹟によって成就されたのは、単なるイエスの復

活ではない。△おれ▽が復活したイエスを演じ、治癒の奇蹟をもたらしたとき、△おれ▽に語りかけたすべての人々の観念もまた、復活したのである。

イエス本人が、作品中に登場せず、どれだけ丹念に会話をたどっても、具体的な像を結ばない理由も、そのように考えれば納得がいく。この作品の世界では、肉体を備えた具体的な存在としてのイエスなど、なんの意味も持たないのである。重要なのは、観念と情念であり、イエスは、そのひとつの象徴的な表現として存在しているにすぎない。むしろ、そこで、独自の意志と個性を持ったイエスが登場してしまっ

ては、作品そのものが成り立たなくなってしまうのである。そして、奇蹟が、人間たちの観念の復活であつたとすれば、それを表現させたのは、彼らの情念だつたと言えることができるだろう。自らの観念を実現させたいと願う、その情念の集積が、超越的な力となつて、奇蹟を起こしたのではないだろうか。

四

このように、「わが子キリスト」では、さまざまな人物のさまざまな情念が相互に関連しあい、奇蹟という超越的な結果を招く過程が描かれている。それは、一見、非合理なできごとではあるが、経験的なレベルで言えば、ある意志を結集したとき、それが、意志の総和を越える力を持つというのは十分に起こり得る事態である。結局のところ、武田が「わが子キリスト」で描こうとしたのは、量的な多数性を得たときに生まれる超越的な力の存在であり、人々に救いをもたらすもの

は、人々の営為の積み重ねの中にしかない、ということだったのでないだろうか。つまり、神は、絶対者として人間に先行して存在するのではなく、人間の情念の集積によって生み出されるものであり、従つて、それを生んだ情念の性格によつていかようにも姿を変え得る相対的存在であるということになる。

このような「わが子キリスト」の世界を一言で言えば、神の発生のメカニズムということになるであろうか。しかし、このような神の出現は、一般的な宗教論の立場から言えば、かなり特異なものと言わねばならない。一般に、宗教的共同幻想は、個人の救済を志向する情念の集積としてたちあらわれるものと考えることができる。宗教というもの

の普遍的傾向として、個人の救済、特に死後の個人の救済の約束があることは、言を俟たない。それが永遠なる「神」の国であろうが、極楽浄土であろうが、ある宗教を信仰することは、自己の救済を約束されることと同義であり、そこにこそ、宗教が発生する根源的な動機があると考へても、それほど見当外れとは思われない。それに対して、「わが子キリスト」に見られる幻想は、かなり趣を異にしている。ユダや最高顧問官は、個人の救済を志向しない。ユダの場合、志向されているのは、ユダではなく、ユダヤ民族の救済であり、ユダという存在は、それを実現するための捨石にすぎない。また、最高顧問官の場合は、志向されているのはユダヤ民族の究極的な支配であり、ここでも、彼自身が救済されることは望まれていない。つまり、彼らの抱く幻想は、きわめて政治的なのであり、共同幻想としてのイエスは、宗教的幻想と言うよりは、むしろ政治的幻想であると言ふべきなのである。

このような「わが子キリスト」の世界が、宗教論として妥当であるか否かは、今は問わない。重要なのは、武田が、イエス復活という宗教的事件を、政治的な文脈に置き直すことで、宗教的共同幻想そのものの根源を、政治的幻想に求めた点である。それは、宗教の政治的レベルでの内幕暴露では、決してない。宗教を突き放して分析するのはなく、救済という宗教の最も重要な部分に踏み込みつつ、そこに政治的な人間の意志を見いだしたということである。あるいは、それは、僧侶であり、宗教の世界を生きた体験を持つと同時に、マルキシズムに関わり、「史記」を読むことで政治的な世界をも知り尽くしていた武田にして、初めて描くことのできた世界であるのかもしれない。

武田の作品には、しばしば、政治的な妄想にとりつかれたような人物たちが登場する。彼らは、己の独立した自我の確立などについて考えたりはしない。あるのは、己をとりまく世界のありようと、その中で己の位置に対する興味だけである。例えば、「森と湖のまつり」では、長篇にふさわしく、多くの人物が登場するが、彼らのほとんどは、アイヌの滅亡という歴史的な流れを常に視野に入れており、彼らの自己表現はなんらかのかたちで、アイヌの運命に絡めて表出される。主要な登場人物である池博士にしても風森一太郎にしても、彼らのアイデンティティーは、アイヌの自立を抜きにしては語る事ができない。つまり、彼らの自己実現は、常に政治的なレベルにおいて考えられているのである。

無論、武田にとって、個の存在は、きわめて重要な課題である。特に、昭和二十年代の作品においては、すぐれて実存的な問いかけが繰り返されており、その重要性を看過することはできない。しかし、一

方で、いささかグロテスクとも言える政治的幻想を抱く人物たちの存在が、武田の作品を、いわゆる近代文学の枠におさまりきらない、大きな存在にしているのもたしかであると思われる。というよりは、実存的な個の追求が、政治的なレベルでなされるところに、武田の武田たる所以があるのではないだろうか。少なくとも、政治的幻想が、奇蹟を通して、最終的に宗教的な共同幻想を成立させてしまうところに、「わが子キリスト」のユニークな点があり、そのような点にこそ、まさしく武田的なものがあると言っているように思われるのである。

この問題は、性急に結論を出せる性質のものではなく、なお、論考を重ねていく必要があろう。一口に登場人物と言っても、男性と女性とでは、大きく異なっているように思われる。また、なぜ武田がこのようなグロテスクな人物を描くのかについても、検討が必要であろう。ひとつだけ予想を述べれば、そこには「司馬遷」における「政治的人間」の問題がありそうにも思われるし、また、「わが子キリスト」に限って言えば、奇蹟の実現を、「史記的世界」との関係で説明できるようにも思われるが、この問題は、ここで論ずるにはいささか手に余るので、機会を改めて考えてみることにして、ひとまずは論を閉じることとしたい。